

父と娘（明智光秀と細川ガラシャ）

—花も花なれ 人も人なれ—

川島 南

この物語は「明智光秀は名君である」という立場から、戦国時代の武将「明智光秀」とその娘「玉」（後の細川ガラシャ夫人）の、父と娘の生き方と思いを、今までの歴史観、価値観を今一度考え直した物語である。

豊臣秀吉の痛快な出世物語である「太閤記」を読んだ方は、明智光秀を「主君殺し」、「裏切り者」と戦国時代切っ掛けの「大悪人である」と印象付けられてきたはずである。

明智光秀も、その娘に生まれた玉も非業な死を遂げたことは哀れに違いないが、歴史は常に勝者側が意図的に、そして都合よく歪めて今なお「正史」としてきている。むしろ敗者側にこそ「正義」や「誠実」というものが存在するのであると考えたい。

物語の時代は戦国時代の16世紀。場所は光秀が誕生したとされる美濃（岐阜県可児市）。築城を許された近江国の坂本（滋賀県大津市）、戦により所領とした丹波・丹後（京都府亀岡市、綾部市、福知山市、舞鶴市、宮津市）。山崎の合戦（京都府大山崎町）に出陣、帰城した勝龍寺城（京都府長岡京市）。

玉については幼少期に育った近江の坂本城、嫁ぎ先の勝龍寺城のほか、幽閉の地である味土野（みどの 京丹後市）迫害と終焉の地となる大坂城城下、細川屋敷の玉造（大阪市）と多方面に渡る。

勝龍寺城（細川藤孝が1568～1580年まで城主）は、平成4年に天守閣が復元され、長岡京市の観光および憩いの場であり、小さいながらも歴史博物館となっている。

毎年11月に「ガラシャ祭り」が行われ、西国街道には楽市・楽座の店が並び、玉の輿入れの行列を市民挙げてお迎えし、祝福する祭りである。「大阪府岸和田市のだんじり祭り」の熱気や激しさはないものの、京都らしいお淑やかな祭りである。

この勝龍寺城は室町時代初期の1338年頃に築城された。城の真南の男山と南西の天王山との隘路に淀川が流れ、その支流である小畑川「旧名：宇波田川（うばたがわ）」を城の外堀とするため、現在の一文橋付近から東に流れていた川を、南へと変え、室町幕府の西国からの攻めに備えた地であり、西に丹波道、西国街道など京の都の玄関口、即ち「要衝の地に築城された」ということである。

現在の地名から、東に流れていた旧小畑川沿いには、上川原、川原町、河原田里、菱川、古川などの川に因んだ地名が今なお残っている。これは「昔は川が流れていた」ことを伝え残していると考えられる。また当時の勝龍寺城一部とされる場所が現存している。勝龍寺城の北側には神足神社があり、そこには土塁の空掘りがある。さらに城のほぼ東側に小畑川大門橋が現存している。このことから小畑川右岸に勝龍寺城の外堀に「大門」が存在していたと考えられる。

美濃明智城主であった明智光綱の一子光秀と、妻木勘解由範熙（つまき かげゆ のりひろ）の娘熙子（ひろこ）とは幼い頃からの許婚であった。光秀との婚礼間近に、熙子は疱瘡を患い、痘痕が顔、首、手に残り、破談になることを覚悟する。お家のためになんとしても破談を避けたい範熙は、熙子と顔や姿のよく似た妹の八重を輿入れさせることにした。光秀は「予の許婚はお熙殿にて、八重殿には御座なく候。いかなる面変わりをなされ候へとも、予の契るはお熙殿にて御座候」の文とともに、八重を返し、熙子を妻に迎え、仲睦まじい夫婦であった。少なくとも熙子存命中には側室を置かなかった。

明智城は斉藤義龍により落城。明智家のお家再興のため放浪の生活をおくる。熙子は光秀を立てるために、髪を切り、そのお代で宴会をするなど、光秀に尽くした。

そして変転 20 年後には、幕臣細川藤孝とともに織田信長の家臣となり、足利義昭を室町幕府第 15 代将軍とする働きや、比叡山焼き討ち後、信長から比叡山監視を目的に京に近い近江の国の坂本に築城、城主となった。

この城で玉は育ち、利発で、才気あふれ、絶世の美女であったことでは有名である。信長の意向により、藤孝の嫡男忠興と婚礼することとなり、玉は 16 歳で勝龍寺城へと嫁いだ。相思相愛の仲の良い夫婦であったようだが、玉は夫忠興と話すよりも優しい父光秀と話す方が心安らいだという。しかし平穩に暮らせたのはわずかな期間であった。

本能寺の変により、玉を溺愛していた忠興は、玉と絶縁できず、人知れない味土野に幽閉した。この時、玉の心を支えたのは、輿入れの時に細川家と親戚筋にあたる清原家の「清原マリア」ら侍女達であった。およそ 2 年後に天下人となっていた秀吉の許しを得て、大坂城下の細川屋敷にて夫婦生活は再開された。

が、外出は一切認められなかった。しかし秀吉の九州征伐時など出兵時には忠興に隠れて、教会に行きキリスト教の教えを聞きに行った。

秀吉のキリスト教禁令（バテレン追放令）が出されるや、玉は焦り、大急ぎでガラシヤ（Gratia=神の恵み）という洗礼名を受ける。

関ヶ原の合戦では細川家は徳川方に味方し、石田三成が大坂城下の屋敷に住む武将の妻を人質にする強硬策に、忠興の命令通り細川の家から出て、人質になることを拒み、

・「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ・・・お玉」

の辞世の句を残し、家臣小笠原少斎に胸を突かせ 38 歳の生涯を閉じる。

このことから、石田三成の「豊臣恩雇の武将の妻の人質作戦」を失敗に終わらせる。

父明智光秀は心優しく、勤勉で、学問好き、真面目に生きようとし、知略に満ち、射撃の天才、歌人の文武両道の名将である。善政を敷き、領国では税を抑え、庶民に慕われ、織田家、幕府、朝廷からも必要とされた大人物である。

なぜ本能寺の変を起こしたか、諸説あり謎である。信長が天皇に対して「天正」に元号改正を強要したなど「朝廷黒幕説」が有力に思える。それは本能寺の変を起こす前の5月24日（あるいは28日）人生最後の連歌会（愛宕百韻）を開き、その発句は、

・「時は今 天が下しる 五月哉」

→土岐(時)は今 天皇が治める世(天が下しる)とする・・・・・・明智光秀

五月は平安時代から「源氏が平家を倒す」という合い言葉(源頼政、5月に挙兵他)

・「水上まさる 庭の松山」

→天皇(皆の神)が活躍を待つ(松)・・・・・・西ノ坊行祐

・「花落つる 流れの末を せきとめて」

→信長(花)が没落するように勢いを止めて下さい・・・・・・里村紹巴

・「風に霞を 吹きおくる暮」

→信長の暗闇(霞)をあなたの風で吹き飛ばしてくれ(暮)・・・・大善院有源

この連歌会は天皇の側近級ばかりで、天皇系複数の人物が光秀の決断にエールを送っていたと考えられなくはない。(怨恨説、徳川黒幕説など諸説ある)

本能寺の変後、反信長国や旧知の細川藤孝らの協力を安土城で待ったが、細川親子の協力は叶わず、織田家最大のライバル羽柴秀吉の「中国大返し」は、想定外に早く4万の秀吉軍に1万6千の明智軍は天王山を押さえるべく、勝龍寺城に向かうが、先に天王山を押さえられ、数の差で敗戦となる。

再起を図るため、坂本城に戻る途中、小栗栖にて竹槍で脇腹をさされ、絶命したと言われている。

・「心知らぬ 人は何とも 言はばいへ 身も惜しまじ 名も惜しまじ」

明智光秀辞世の句とも言われている。

天下人秀吉は朝廷を味方に取り込み、明智光秀のみを悪者に仕立て上げた。

(生き延び、徳川に仕えた「南公坊天海」は「光秀」であるのは有力な説ではある)

先の大戦「応仁の乱」では山名宗全の西軍の拠点となっていた勝龍寺城は、盟友の細川藤孝が再建し城主となり、娘の玉が嫁いだ城であり、そして父光秀が山崎の敗戦で帰城する城になるとは、藤孝も光秀も、玉が輿入れする時には想像もできない、そして悲しい因縁の城となった。

『時』は今」と見た父、「散りぬべき『時』」を知った娘、「時」を見定めることは、人生において大変重要なことであることを痛感させられる。

細川藤孝・忠興は「時」の流れをよく読み、お家のため権力者に呼応し、元首相の細川護熙氏まで、細川家は今もなお存続している。

参考文献

「勝龍寺城は語る」 長岡京市教育委員会

「細川ガラシャ夫人」 三浦綾子

「明智光秀 物語と史跡をたずねて」 早乙女貢